

---

# 猿の手妖怪指 5 本

カービー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猿の手妖怪指5本

### 【Zコード】

N6281A

### 【作者名】

カービー

### 【あらすじ】

猿の手を手に入れた芦崎隗斗あじさきかいとは、猿の手の伝説5つの願い事により、猿の手の主……いや、隗斗の神様でも言える猿の妖怪力ミと一緒に低脳な奴等を殺していく。だが、芦崎隗斗に待ち受けるものとは……。

## プロローグ（前書き）

初めまして。カービーともうします。  
猿の手は代々昔から伝わるモノなので、イメージを崩さないように  
作品を書けあげれたら嬉しく思います。温かい目で見て下されば  
とても嬉しく思います。

# プロローグ

猿の手を手に入れなければ

僕は今生きていなかつた

人生に不愉快を感じだした僕は

猿の手を手に入れた

世界に一つしかない

妖怪の猿の手を

ありがとう猿の手

この世に感謝するよ

## 第1話・「静まつかる教室」

俺の名前は芦崎 魄斗

現在高校一年生 16歳

「おい、魄斗！この宿題教えてくれよ」

クラスメイトの一番馬鹿が俺に宿題の問題を聞いてくる。

俺、こいつの事あんまりスキじゃないんだけどな……。

そんな事を思いながら教えていた。

「ちばーよー向でこじがっこになるんだよ」

教えているけれど……。

マイシの馬鹿さ加減に腹が立つ。

「どうなるんだよーーあーあー魄斗みたいに頭良くなりたい

そつと聞いて鉛筆を指でまわしながらため息をつくる。

ため息をきたいのは俺の方だ。

「おーこうなるんだーやっぱお前頭良いなーありがと

そつと聞いて自分の席に戻つていった。

俺は学年で一番頭が良い。

皆からもそう思われているし、自分でもそう自覚している。

もちろん、勉強度は人並みより精一杯しているからだ。

だから

”頭良いねー、脳みそ交換してほしいよ。”

とか言われるのがイラついてくる。

帰りに爺ちゃん家に寄つてみるか……。

「ひい辺の近くだしな。

お小遣いもほしいし。

俺はそんな事を思いながら外を見ていた。

何故かクラスはホラー好きなやつらが多かった。

「ねえねえ魄斗君」

そう言ってクラスの女の子が俺に話しかけてくる。

何だよウザーな……。

「何

俺はそっけなく返事を返す。

クラスの女の子は困ったような表情をみせる。

「怪談系興味ない?」

「怪談?」

「例えばー…………」

正直俺も少し興味はあった…………。

興味がないと言えば嘘になる。

「興味あるけど」

俺がそういうとクラスの女の子は調子にのつて

俺に質問攻めしてくれる。

「今度、学校の夜を探検しようつよいー」

「は……?」

いやだしー!

「二人でー?」

そう聞くと何故かクラスの女の子は黙つて顔を赤らめる。

またか……

俺は一週間に2、3回は告白されるから、女の子のそつけない行動が分かつてしまつ。

俺の何処が良いんだか。

気づいてない振りをしてみせる。

「怪談系どうこうのが興味ある?」

クラスの女の子は話題を変える。

”どうこうの”ついわれても……。

”うへりとか、あつきたりなのイヤだし。

カッコイイ」と聞いてみるか……。

「猿の手」

俺が一晩いつひとつ何故かクラスは静まりかえった。

## 第2話・「うち解けれなくなつたクラス」

「猿の手つてなんだよ……」

一人のクラスメートの男の子が俺に向かつて笑いながら言つてくる。

俺は少し頭に血が上つて暴言を吐いてしまつた。

「猿の手しらねえのかよ……馬鹿にもほどがある」

俺がボッソリとクラスの奴等は俺を遠い目で見る。

俺の体に何故か緊張が走つた。

でも誤らない……

何も悪いことは言つてないから。

「つでそーーーーーーする? 怪談……いつにする?」

俺を抜かしてざわざわ話しあいを始めた。

学校で怪談系をするらしい。

俺は無理やり話題に入ろうとはしなかつた。

こいつ等の低脳に驚かされている俺も馬鹿だと思つたからだ。

数人の連中が俺に向かつて嫌みな事を言つてくれる。

「天才君はまつたく困っちゃうよなー少し頭が良いからって俺たちを下にみれるんだもんな」

は……？

失せる、低レベルなガキ共が。

「天才じゃねえーよ」

俺はそつと文句つけてくる奴等をガン見した。

「やっぱ……クールだよね！」

俺の事をそつと女子にも腹が立ちガン見した。

これで、クラスにもうち解けれなくなつた。

そつ思うとスッキリする。

いつまでもこんなクラスに居なくちゃいけないんだ。

俺は後々そんな事ばかり考えていた。

「もつ嫌」

俺はボソッとそつと文句ついて席を立ち授業中にも関わらず帰る準備をした。

「芦崎君、まだ午前中だぞ、保健室にでも行ってそのまま早退する

のか?「

生物の教師が俺にチヨークを向けながら言つ。

なんでこんなアホな脳で教師が務まるのだろう……。

単に教科書読んで、教科書通りにプリント印刷して穴埋めにしてるだけの授業なんて、たかがしれている。

それより家に帰つて自主学習をした方がマシだ。

「面白くないから帰る」

俺がそつと鞄を背負つと

俺の一つ隣の席の奴が憎い言葉を発していく。

「学校来る意味あんのかよ」

俺はその言葉を聞いてムツとした。

一応俺の学校は進学校で頭も良いと言われている学校だ。

だから、どんな学校か入学はしてみたが……。

ありえないくらいにシマラナイ授業で一日田で覚めてしまつた。

それから良くていいへりやつて卑退する事が多くなつた。

でも、テストで常に一番を勝ち取つているから別に良いと思つてこ

る……。

俺はソイツの言葉を無視して教室を出た。

靴箱に何か封筒付きの手紙が入っていた。

「放課後、校舎裏で待っています。」

中身を見てみると、手紙が書かれていた。

「またか……。」

俺はそのまま手紙をビリビリと破って、ゴミ箱に捨てた。

恋愛とかダルイの俺にはできるか……。

俺はまだ初恋がない。

彼女ほしいとも思わない。

居ても邪魔になるだけ。

そう思っているから……。

### 第3話・「恋愛なんてできるか？」

「あれ…… 魄斗君？」

一人の女の子が話しかけてきた。

あれ……。

今授業中じゃないんだっけ？

俺はそんな事を思っていた。

「やつだけビ」

「あ、手紙下駄箱に入れた梨園なしやの 美優みゆうです……」

女の子は下を向いて顔を赤らめながら俺に言ひつ。

俺は今の状況をすぐに把握した。

ああ……。

手紙、それなら捨てちまつたよ。

「読みました」

俺は適当な事を言つた。

捨ててしまつたけれど、読んだことは変わりはないのだから。

「あの、傀斗君の事がスキです」

は……？

俺はいらだつてしまつた。

俺の何処を見て言つてるわけ？

何処がいいの？

性格……それとも……顔？

「『』めん、俺は……」

そつ言つてわざと困つたような顔を見せた。

俺の演技っぷりにダメされる奴も多い。

その女の子は泣きながら何処かへ言つてしまつた。

はあ……。

俺はため息をつきながら「ミミ箱に捨てた手紙を見た。

これ、見つかったらやつぱり傷つくよな。

俺はそう思つてビコビコと破つた手紙を綺麗にひらってポケットに入れた……。

恋愛なんてそんなちっぽけな事。

時間の無駄なんだよ……。

俺はそんな事を思いながら爺ちゃんの家へと向かった。

相変わらず変わらない家の家も……。

「おー！ 魄斗！ 忙く来たな～」

爺ちゃんはそのままして俺を出迎えてくれる。

爺ちゃんは結構顔がやつれていた。

歳を取ったからだろうか？

「爺ちゃん少し痩せてねえ？」

「そんな事はないぞー！ 元気だ」

そう言つて腕を見せてくれる。

腕を見せてくれても……。

でもなんか安心する。

## 第4話・「手に入れた猿の手」

「爺ちゃん、さあ今まで何してたの？」

「それが、凄いものみつけたんだよ、さつき小屋を掃除してた時なんだけどな……」

爺ちゃんがギラギラとした目で話す。

俺もつられてワクワクした表情になっていた。

とつあえず小屋に行つてみる」とした。

爺ちゃんは大きい箱に入っている手紙らしきものと、布で包んである何かの……マイラみらこな手を差し出してくれた

なんだこれ……？

「昔からこの家にだいだい伝わるものなんだよ」

爺ちゃんはさつまつてマイラみたいな手を眺めている。

「それ……一体なんなの？」

爺ちゃんがあまりに嬉しそうに眺めているから。

ふと聞いてみたくなつた。

爺ちゃんは真剣な表情で俺にこの言葉を口ひした。

「猿の手だ」

猿の手……？

俺は一瞬頭の中が真っ白になつた。

これが猿の手？

俺は猿の手を爺ちゃんから強引に奪つよつて手に取つた。

これがれば……。

「イツが俺の願いを叶えてくれるんだ。」

「爺ちゃん、これを俺に下さー。」

俺はつい猿の手ほしさのあまりに口調が敬語になつてしまつた。

爺ちゃんの反応は凄かつた。

そりゃそりだ……。

猿の手は指が5本ある。

つまり5回願い事が叶えられる。

そして最後には……。

「駄目だ、いくらお前でも猿の手を使用する」とは許せん

爺ちゃんはそれを聞いて俺から猿の手を奪い取る。

だって……。

あの猿の手だ。

皆ほしいに決まっているじゃないか。

でも……。

「何で猿の手を？」

俺がそう聞くと爺ちゃんは首をかしげた。

分からぬのか……。

まあ、良い。

これもえあれば俺の通りに人生が動くんだ。

「お願い爺ちゃん……」

俺は泣きわなな顔を爺ちゃんにして見せた。

爺ちゃんは困ったような表情を見せる。

そして、ついで……。

「わかった、猿の手をおまえに授けよう、でも……」

わかってる。

最後じうなるかくらーい。

猿の手の伝説を知らないで言つてるわけじゃない。

俺もそんな馬鹿じゃないよ。

「ありがと、爺ちゃん……最高のプレゼントに感謝するよ」

俺は、ニコッと笑った顔を見せ手を振り猿の手を見つめながら時間をかけて家に帰った。

これからゲームが始まるんだ。

## 第5話・「みづひそ妖怪力!!」

ベッドの上できずつと猿の手眺めていた。

さて、猿の手をどう使いこなそつか。

「猿の手……俺の元に舞い降りてきてくれたて嬉しいよ

俺は内心猿の手に話しかけても何の変わりもないと思つたが……。  
猿の手にも一応お礼を言わなくてはならないと思つたからだ。

これからコレで思う存分楽しめるんだ。

「どうどう俺も楽しめるな」

そう言って何かが猿の手から出でてきた。

何だ！？

化け物？幽霊？妖怪？

俺は顔が引きつってしまった。

化け物か幽霊か分からぬ猿の顔をしたヤツが俺の方をジット見て笑っている……。

俺の額に汗が流れ落ちる。

ヤツの顔はとても怖い。

皿は鋭く、口から歯が出ていて……体は骨状態だ……。

鼻も潰れている状態で血管がじきものが体中に見えていた。

「どうした、俺が怖いか？」

ヤツはそう言つて顔を気持ち悪いくらいに微笑まる。

怖いなんて……

「怖いなんて思わないが、これから楽しいゲームが始まるんだ」

俺が無理笑いをしてるとヤツも笑つた。

「ビコビコと背筋に血が上る願い事してくれよ」

ヤツはやつて俺に触れる……

「お前……何者だよ」

俺は顔を青ざめながらヤツに質問した。

「俺は猿の妖怪さ、その手は俺のものだ……俺は地球が生み出される前に誕生した……たつた一つの妖怪さ」

なんだそれは？

地球が生み出される前に？

「まあ……大きくなれば妖怪だ、名前は……カミ」

そこでヤツについての簡単な説明は終わってしまった。

カミってあつたりな名前だな。

そう言ってカミという妖怪は自分の頭をボリボリかき始めた

「カミか……」

俺はそう言って猿の手を撫でる。

カミは俺の方を見てニヤリと笑みを浮かべる。

「せうせう……お前にとつて俺は神だろ？お前の願い事を叶えてやる  
んだからな」

俺は腹を抱えて笑い込んだ。

そういう意味かよ。

まあ良い……

「確かにそうだな、俺の名前は芦崎隗斗だ」

そう言ってカミと俺は握手をした。

カミの手はぬるぬるしていて冷たかった。

猿の手も神様も揃った所でゲームスタートって所か

面白い

「楽しそうでやるよ…… カミ!……」

「もう願い事は決まっているのか?」

カミは俺の顔をのぞき込むよつて見る。

俺は嫌みな笑顔をカミに見せた……。

「ああ、とりあえずな」

俺がそつとカミも笑い出した。

「ハツハツ…… どんな願い事なのか言つてみろよ」

カミはそつと自分の猿の手を触る。

「低脳な奴等を全部殺したい」

俺は変わらず嫌な笑顔をカミに見せた。

カミは少しビックリした表情を見せたが

すぐに表情は元に戻り笑っている。

「ハツハツハツ……面白い願い事じゃねえか」

「だろ？」

「今すぐ叶えてやる？ その願い」

カミはニヤニヤと笑いながら俺に向つ。

今すぐか……

「いや、明日からで良」

俺は再びベッドに横になつた。

そう言つとカミは俺のノートを勝手に見だした。

「…………」

俺はそんなカミの様子をズット見ていた。

「わからねえな、こんなのを教えて貰つているのか

カミはそう言つて難しい顔をしてくる。

意外と面白いやつだな”カミサマ”は……。

「あ……けど、全然授業出でないけどな

俺はそう言しながらカミからノートを取り上げた。

無表情でノートをペラペラとめくる。

そしてノートを机に投げ捨てた。

「……カ///の指は何本なくなるんだ?」

俺は笑うとなく真剣にカ///に聞いた

カ///は一ヤ一ヤと笑いながら

「やうだな……3本くらいか……?」

3本も!?

そんなになくなるのかよ

「今”3本も”つけておもつただろ?」

俺はカ///の言葉に思わず声をあげてしまった。

「何で……」

「思つてるとくらい分かるんだぞ、低脳の奴等を全て殺すんだろ  
本くらいの価値ねえとな」

俺はその時ふと思った。

いつたいこの猿の手の価値はどんなに凄いんだよ……。

「3本消えてくれて良いよ……それで、低脳な人物が死んでいくな  
ら……だけど、俺の目の前で殺してくれ」

「ああ……いいや、了解」

カミの不気味な笑いは俺の心を締め付ける。

3本消えるのか。

つてことは……

あと願い事残り2回。

2回で十分だ。

ありがとうカ///……

面白くなりそうだよ。

## 第6話・「演技と死」

翌朝俺は学校に向かう準備をする。

「カミ……今日からだ……」「

俺はカミに真剣な顔をして言う。

「ああ、分かっている」

カミはやつて猿の手の中に戻ってしまった。

俺は猿の手を大切に鞄に保管した。

芦崎隗斗……俺は、犯罪者になるのか？

いや、犯罪者は殺してくれるカミだ……。

俺は犯罪者なんかにならない。

そう自分に言い聞かせ教室に入った。

昨日の途中からクラスの連中は俺に冷たい暴言ばかり吐く。

そして今日も……。

「お前、そろそろ学校やめれば？」

「お前がやめれば？」

普段は無視するが今日が「アイツの命日なんだ。

だから少ししゃらに相手してやれりと黙りて負けずに言に返す。

俺は席に着き鞄に入っている猿の手をこすった。

(おい、カミ聞こえるか……?)

俺は心の中でカミに話しかけた。

(ああ、わしゃるやい……)

カミの声が聞こえたと同時に俺の顔に笑みが浮かび上がってきた。

(アイツを殺してやつてくれ)

(ハツハツハツ……了解、じつにう風に殺してほしいとかある  
か……?)

俺は頭に手をやつ考え込んだ。

どうこう殺し方でもできるのか……?

まあ、良い最初は軽い死に方で殺していくつ。

(アイツの首を絞めるだけで良い)

(「解……神様に感謝しろよ……」)

カミはそう答えた後にすぐに俺に暴言を吐いた奴の首を閉め始めた。

「ツツ……ー? ゲホツ……なんだ……」

ヤツはあまりの苦しさに自分の首に手を当てながら床に寝転がつてしまつた。

クラスは大騒ぎになつた。

(カミ、もつと首を締めて良いよ)

俺がそう思つと同時にカミは俺の思考を聞き取つたのかヤツはもつと苦しみ始めた。

「ウウ……カハツ……ガアアツ……」

「誰か、救急車を呼んで……」

慌てるクラスの連中。

それにも関わらず俺はカミにずっと指示していた。

皆から見れば、天才の傀斗でもどうして良いか分からないと様子を俺は見せていく。

「かつ……傀斗……ビツすれば」

ヤツの親友が俺に話しかけてきた。

「うう」「イイツも俺に暴言を吐いた奴だ。

俺は内心笑いに包まれていたが外面だけ焦る振りをしてみせる。

「とりあえず、落ち着け……救急車は呼んだのか？」

「ああ、さつき救急車を呼んだッ」

苦しんでいるヤツの親友の表情は見る見るうつむき青ざめていく。

そりやお前の友達が死にそうな状況だったら、どうして良いか分からぬから青ざめるのも無理はないよ。

「大丈夫かよ……お前まで死にそうな顔されちゃ俺どうして良いかわからないんだ！しつかりしろよ」

俺は必死で親友を励ます演技を続けた。

（おい、カミ……救急車が学校に来たらヤツをいい加減死なさせてくれて良い……もっと、ヤツの苦しむ姿と哀れなクラスの連中を見ておきたいからね）

（（ハツハツハツ、つぐづくお前もヤな奴だな））

（ハハハ……まあ、俺が殺しているわけでもないんだし別に良いだろ）

俺がそうカミに伝えるとカミからの返事が返つてこない。

どうした……？

一瞬の沈黙が俺とカミの間に流れた。

すると

カミは笑いながら俺に返事を返してきた。

（（でも、指示して俺に殺させているのはお前だせ……俺は妖怪……  
人間じゃない、殺人者はお前なんじゃないか？魄斗……））

## 第7話・「俺は正義なんだよ」

俺が殺人者……？

でも、皆俺が殺している事は分からぬに決まっている。  
もし、殺人者で、あの世が……天国と地獄になつてゐるのなら、俺  
は地獄に行くというのか？

面白い……。

絶対地獄には行かない方法俺はとつぐに見付けてるんだよ。

それは最後の願い事だからな。

（俺が今の時点で殺人者を言つことか……？）

カミニは俺に笑いかけながら

（（そらだせ、どうする？今ならまだ間に合つが……））

と言つてきた。

せつかく面白いゲームが始まつたばかりじゃないか。

終わらせる気なんてないよ。

（いや、この時点で殺人者になつたのなら、俺は最強の殺人者にな  
つてやるよ）

俺はそうカミに想い伝え——ヤリといやしい笑いを見せた。

救急車が学校に到着した。

ヤツは涙を流しながら苦しんでいた。

(カミ……そろそろトドメを刺せ)

「グアアアアアアア——！」

ヤツは大声で叫びをあげ、数分後には静かになつた。

ヤツはとつあえず病院に運ばれた。

クラスの不安感とやわつきは消えない。

ハハハ……ザマヤミロだ、ヤツみたいな低脳が俺に殺されていくんだよ。

その後は放課になつてしまつた。

放課か……せつかく面白くなつてきたと言つたのに……ハハツ、まあ良こや。

家で自主学習、つまり次の犠牲者をゆづくつ考えてやるよ。

「なあ隗斗、久しぶりに一緒に帰るぜ」

あまり仲良くなかったハズの古池 こいけ 崇が俺に話しかけてきた。

何だ……？珍しいこともあるものだな。

今は気分が良い、一緒に帰つてやるか……。

俺はそう思い、ゆっくりと微笑んだ。

一緒に帰つているが、沈黙で何の話題もない。それに耐えられなくなつたのか古池は、今日の教室で起こつた出来事を話し始めた。

「今日ビックリしたよな……まさか、アイツが倒れたとかー」

「まあな。俺もビックリしたよ……」

「さすがのお前も、アイツの親友の表情が青くなつていった時は、一生懸命励ましてあげたもんな、俺あれには感動した……」

「ハハハッ……」

古池の発言に俺は素で笑つてしまつた。

あれは芝居なんだよ……。ああでもしなくちゃ何の感心も見せない俺が犯人扱いになつてたかもしれないだろ？

クラスで嫌われ者の俺が犯人扱いなんて。疑われたら、たまらないからな……

「そりや、一生懸命励ますぞ……普段酷いこと言われたつて、クラスメートだからな」

俺の発言に田代を輝かせる古池。

何処まで馬鹿なんだよ、お前も……。

「それじゃ、俺こいつちだか！」

「おひ、またな……」

俺はそつと古池が見えなくなるまで手を振り続ける演技をし続けた。

低脳なヤツから消していく。残念だな、古池……

お前の命は明日で終わりだ。

カミが俺に話しかけてきた。

俺も上等な笑みでカミに笑い返す。

上等だつたよカミ……

「まあまあだな、明日も頼むぜ」

俺は思つてることと裏腹に、辛口で判定した。

「まあまあかよ、明日はどんな殺し方でいくつもりだ？」

「さうだな、まあ……一緒に家に着いたらゆづくつ考えよづじやな

いか」

俺がそういうとカミは恐ろしい笑いをして見せた。

殺人者も悪くねえな。

だが、俺は自分の事を殺人者なんて思わないよ。むしろ正義の味方  
と思っているくらいだからな……。

## 第8話・「油断は禁物」

「魄斗ーー！ 今日あなたのクラス倒れた人が居たんだって？」

家に帰るときなり母さんが大声を出して玄関に現れた。

もう噂になつてゐるのか……

「ああ……死ん……」

俺は言いかけた口を急いでふさいだ。

「何があつたのよ、ねえ……」

「分からぬ。いきなり倒れたんだよ」

俺はとつさに”死んだ”と口にする所だつた。

まだ……”死んだ”と学校に知らせはきていない。俺たちは知らないことになつてゐるんだ……。ここで、口を滑らせたら終わりだ。

「ちょ、魄斗ーー！」

母さんの言葉を無視するかのように、俺は自分の部屋に急いで戻つた。

「どうしたよ、魄斗」

部屋に戻るとカミが俺の急変した様子に心配してくれた。

「ハハツ……」

俺は苦笑いをして見せる……。顔が真っ青なうえに額に汗をかいていた。

「大丈夫か?」

「ああ、大丈夫さ……」

俺はそう言つて落ち着くよう、ベッドの上に寝転がつた。

「せつまじうしたよ?」

カミは俺の上に乗つかるように俺に顔を近づけて質問する。

「思わず、”死んだ”と言つていただつたよ……」

俺はカミから視線を外してから言ひ。

「言つても良かつたんじゃないか?何の書もないだろ?」

「言つたら何もかも終わりじゃないか。まだ、学校に知らせはきてないんだぞ……。母さんが口を滑らせて、違う人に言つたら、何故知つていたんだと言つことで俺が、疑われるかもしれないだろ?」

俺は手を頭にあててカミに言つた後に深呼吸をして、心を落ちつかせた。1ミリの油断も禁物だ。

「ああ――なるほどな」

カミは理解したのか首を盾に振る。

「殺人者も大変だな。」

「ああ、大変や……」

俺はそう言いながら、ベッドの側を離れ、制服をハンガーにかけ始めた。

油断禁物のゲームだな。

おかげで寿命が縮むよ……。

制服をハンガーにかけ終えたら、机に教科書を広げ鉛筆を机の上でコソコソと鳴らしていた。

「何やつてるんだ?」

カミは教科書を取り上げて眺め始めた。

「勉強だよ」

俺はそう言いながらカミから教科書を奪い取った。

「へえ……偉いな」

「ハハツ、一応大学行こうと思つてるからね」

勉強は「レ<sup>レ</sup>く<sup>く</sup>らい」で良いか。

俺はそう思い、教科書を閉じ……机の上を片付け始めた。

「やべ……。どうするか、畠田君

俺は力ミの方を見て微笑みながら言う。それに答えるかのように力ミも俺に笑みを浮かべみせる。

「どういう殺し方をするんだ？」

「そうだな……今度は別の殺し方で殺してみたいね。」

俺はそう言つと、冷蔵庫に入つてゐるケーキが食べたくなつたので取り出して自分の部屋に持つてきて、食べ始めた。

「ハツハツハツ……まあ、お前が明日殺したい時に指示してくれれば別に言わなくて良いけどな」

カミは俺が食べているケーキを一つまみし自分の口に運んだ。

「んお！ なんだこれは……美味しい」

よほどケーキが美味しかったのか、全部カミに食べられてしまつた。

明日は昼までか……。

今日死人が出たので、午前で終わりの予定になつていてる。

## 時間制限は放課後まで



## 第9話・「最高のゲームの幕開けだ」

「それじゃ、もひ寝るかな

俺は風呂も入らずに、夜食も食べないまま眠りこしつして  
いた……だが、その時。

カミが俺に衝撃な言葉を言つてきた。

「お前があと願い事一つ言つたら俺は消える」

え……？ 消える？

「何で」

「”何で”つて……。俺はお前の願い事を叶えるために今ここに居  
るんだ。残り二つ叶えてしまえば、俺の役目は終わるんだ。そして  
俺は……」

そつ言い残すとカミは眠りこしつしてしまった。

確かに。カミの言つとおりだ……。カミは俺の願い事を叶えるため  
に今ココにいる。カミは俺にとつて神様なんだからな……。でも  
そして俺は……”の続きは何だ？

俺はそればかり気になつていた。

だが、カミを今無理やり起こす訳にもいかない。

俺は気になりつつも眠りに入った。……。

「おー、隗斗起きる」

カミの言葉で俺は目が覚める。

俺はさすがに昨日の事を聞いてみた。ずっと昨日の事が気になつていて俺は額に汗をかいていた。

「カミ……昨日の事。続き話してもらおうか」

カミは少し不安そうな顔をした。今までカミの不安そうな顔は見たことがなく、俺に緊張が走った。

「お前の真実も知ることになるぜ?」

ああ、良こそ。どんな事でも俺は覚悟できている。

「話してくれ」

カミは窓の外を見ながら俺に話し始めた。

「お前の願い事をあと二つ俺が叶えたら……俺は封印が解けてあの世に行く。俺は、俺の手……通称”猿の手妖怪指5本”の呪いを受けている」

猿の手妖怪……？呪いを受けている？

一体どうこう事なんだ。

カミは深呼吸をし心を落ち着かせ再び話し始めた。

「猿の手妖怪指5本の伝説……それは、この世に妖怪が誕生した時。妖怪は妖怪に産まれてきた罰として、人間のために願い事を5つ叶えてあげなくちゃいけない。それで、神様から妖怪に下された罰は終わる……つまり、神様から許して貰える」

俺はベッドの上から下り、カミに勢いよく怒鳴った。

「そんなのおかしいじゃないか……カミは妖怪に産まれてきたくて、妖怪に産まれたんじゃない。そんなの、間違ってる」

「でもこれが伝説なんだ。妖怪の”決まり”なんだよ……。」

”決まり”そう言われたら何の言葉も出てこない、自分が憎く感じた……。カミは俺の不安そうにしている表情を無視してそのまま話し続ける。

「隗斗……、一つの願い事が終わったらお前も死ぬ」

俺の心臓の音は一きなり早くなる。

分かつていたさ、そんな事。だからその手はもう打つてあるんだ。でも、直接お前の口で言われたら俺の思考が一oprる……。

「お前も、俺も死なない方法を見付けてあるから大丈夫さ。俺は一つの願い事が終わっても死なない。そしてカミ……お前もだ」

俺がそうこうとカミはやつと少し笑みを見せた。

残り一つの願い事が終わって死ぬ運命なんて……。そんなの望んでいないんだよ。

生きてやるわ。

どんな手をつかっても……。

「そりそり学校に行くとするか」

俺は制服に着替え何も食べずに家を出た。

「隗斗ーーー！ 担任の先生から連絡が今わしあって、学校休みみたいよ」

母さんは俺に叫びながら言へ。

学校休み……？ まあ、昨日の事があつたから学校休みになるのも無理ないな。でも、これじゃ俺のせつかくの計画が……。

「ああ、今戻るぞ」

俺は下を向いてゆっくりと皿碗に向かつ。

「隗斗、残念だつたな」

カミは猿の手から出てきて俺にニヤ笑いをする。

そんなカミに俺もニヤリと笑みを見せた。

「まあ、良いか。今日は休憩だ」

「今日も家に居るのか？」

カミは遠慮せずに俺に悲しい声で問いかける。

「そうだな……。たまには出かけるのもいいか。遠い所に行って、他の低脳を殺すというのもまた賛成できる話だ。」

「離れに行くか」

俺は母さんにお小遣いを貰つて、新幹線に乗り、東京の渋谷に行く。

「キヤハハツ、私なんて親父をさ……」

不良の声が、つるりと聞こえる。

「…………」

「びつした、隗斗」

「全員殺したくなる」

俺はそつと側にあつたベンチに座り渋谷の周辺を見渡した。

「低脳な奴等を消していく……。時間はものすごくかかる目標だ。一気に殺しても良いが、そつすれば、たちまちコースで放送され、世間の話題になるだろ。ますます面白くなるかもしねいが……。」

……覚悟はいる。

俺は顔にタオルを当て、考え込む。

「俺から遠くに離れる」とはできるか？

俺はカミに睨みつけた風な表情を見せながら言つ。

「……ああ、遠くでも殺すことはできる。低脳な奴等を殺す=3つ  
の願い事を終えたコトで、取引してんだからな 猿の手と妖怪を  
馬鹿にするな……」

ハハハツ、悪いな、カミ……。そうだったな、低脳の奴等を殺すこ  
とで”猿の手”と取引している事を忘れるといひだつたよ。

面白くするには……何か痕がほしい。できれば”バラ”を一輪置く  
とか……。証拠になるもの。単に殺していくのも面白くない。

「どうしたよ？」

「カミ……何か痕が欲しいんだ。殺した証拠になるコトが」

カミは俺に不安そうな顔をする。

「だが、痕が残るようなコトをしたら、お前が追いつめられるかも  
しないんだぞ」

「わかつてゐる。それが面白いんじゃないか……心配するな」

俺がそう言つて軽い笑いを見せると、カミも俺に微笑んでくる。

「俺が額に入るくらいの大きさで、毎回血で”死”って書いてやるよ」

”死”か……。分かりやすいな、それは良いアイデアだ。

「じゃあ。力……頼むよ」

面白くなつてきた。

これから、世界は俺中心で動くんだ。

ここからが本番なんだ。

最高のゲームの幕開けだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6281a/>

---

猿の手妖怪指5本

2010年10月23日01時13分発行